

# トランクいっぱい の 沖繩

仲吉史子



仲吉史子

トランクいっぱい  
の沖縄

みき書房

## トランクいっぱいの沖縄

---

昭和51年5月20日 初版発行

著 者 仲吉史子

発行者 島 澄

発行所 (株)みき書房

東京都新宿区須賀町3第二宿谷ビル

電話 (03)341-7026

振替 東京57465

---

印刷 (株)三秀舎 製本 (株)嶋崎製本

©1976 Fumiko Nakayoshi Printed in Japan

0095-6019-8065

トランク  
いっばいの  
沖繩

目次

序章 わらべ唄から 3

一章 台湾で敗戦を迎えた 15

二章 焦土となった沖縄に帰る 41

三章 誇りだけに生きる士族の婚家を出る 59

四章 天願QM部隊で働く 81

五章 白梅隊は白骨になっていた 121

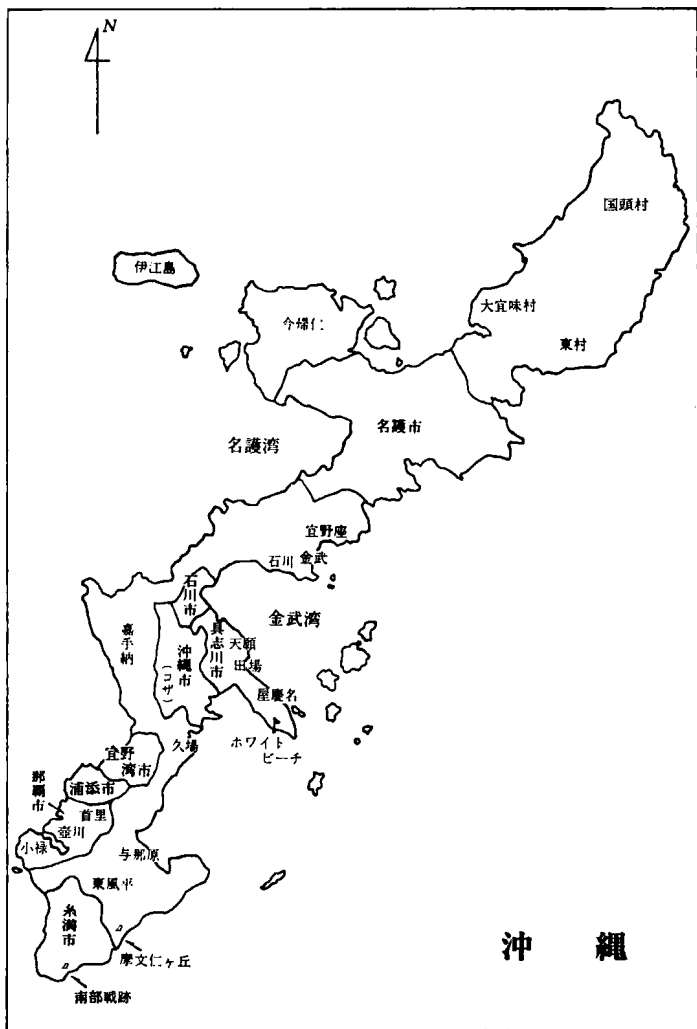
第六章 パラシュート舞踊団 129

第七章 グロリア台風のあと、私は結ばれた 155

第八章 那覇に帰る——バンドの歌手に 205

第九章 基地・沖縄を去る 235

あとがき——牧師さんへの便り 271

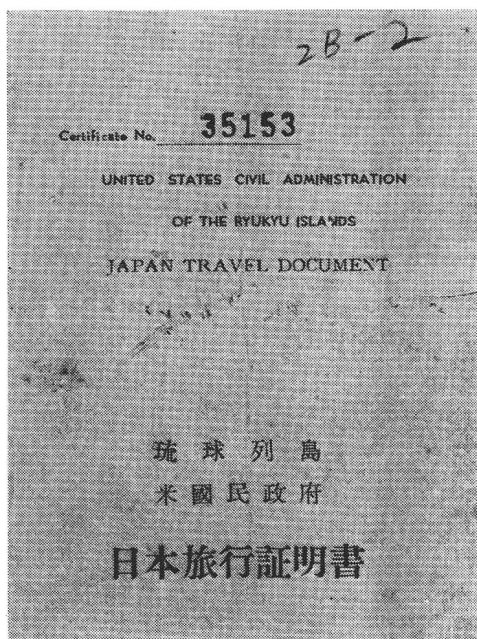


## 序章 わらべ唄から

本土にいて沖縄を語る、という私の試みは、昭和三十六年沖縄のわらべ唄を本土の子供達に教えるということから始まった。それはまだ私自身の郷愁や、音楽への断ちがたい思いなどと、分明にはわがちがたい、意図としてはかなりあいまいなまでの出発であった。それが私の中で次第に明確な形をとり出し、ぬきさしならぬ位置を占めてくるのには、幾人かの方々との出会が必要であった。

昭和三十一年一月、私は戦後の沖縄に見切りをつけて、家族と共に本土に移住した。私の家族はその時、横浜生まれの本土人<sup>やまとじん</sup>の夫と、沖縄人<sup>うちなんぶ</sup>である母と私。それにやはり沖縄人<sup>うちなんぶ</sup>である先夫との間にできた三人の子供の、計六人であった。

沖縄は美しい島であった。空も海も草木も、住む人々の人情も、みな美しい島であった。戦



沖縄から本土に渡るには パスポートが必要だった

歩くのにパスポートが必要なのだ、と叫んでみても、その声はどこへも届かないで徒らに自分の胸に戻ってくる。それが沖縄の現実であった。

戦後まもなく、私は最初の夫との結婚にやぶれた。戦争さえなかったら、私は今も平和に暮らしていられたのだという思いが、沖縄の姿と重なって、私は二重にひき裂かれてある自分を感じていた。母と三人の子供をかかえて必死で生きるうちに、うっ屈する思いは、私の中に徐

争がその沖縄を無惨にこわし、そしてこわしたあとに沖縄で、ない沖縄を作ってしまった。本土から切り離され、アメリカの属領と化したこの島は、朝鮮戦争を機に、次第に基地としての役割を果たしていた。本土に渡るにはパスポートが必要だった。しかもその手続きは面倒で、屈辱的でさえあった。なぜ自分の国の内を

徐に一つの怨念を育てていった。

私が自分の生活の断片を記録しはじめたのは、沖縄の置かれた位置と、切り離すことのできないものとして考えていたこの怨念の根を、いつか断ち切るためであった。それがいつのまにかたまって、沖縄を離れる時にはトランクいっぱい量の量になっていた。原稿を詰めたトランクを持って、私は本土へ来たのである。

子供達にはじめて見る本土であった。東京に落ちついてしばらくした二月のある夜、はじめて雪が降った。午前二時、ぐっすりと寝込んでいる子供達をゆり起こした。三人は真白い雪に目を見はり、それから庭にとび出して、雪の中を犬ころのようにころげ回った。

「雪だ！ ほんものの雪だ。忠臣蔵の雪だ！」

南国の沖縄に雪は降らない。私たちが知る唯一の雪は、映画の「忠臣蔵」の討入りの場面で見える雪である。だから沖縄では雪と忠臣蔵が、切り離せないものとして結びついているのだ。

「忠臣蔵の雪」とは沖縄人のことばである。慣れない土地で、子供達は驚くほどの柔軟さで適応しはじめてはいたが、それでも学校の教科書や進み方が違う、ことばや習慣が違うということで、戸惑いは多かった。ほんものの雪の冷たさを肌で知り、それとたわむれることで、子供達も私もやっと本土の感触を得た思いがした。

昭和三十四年に、沖縄の家を処分したお金で、世田谷区奥沢に新しい家を建てた。末娘がこ

の家で生まれて、家族は七人になった。翌三十五年には、家計の足しにするためにここで音楽教室を開いた。

沖繩が日本に返還されるまでは帰るまいと決心して、沖繩を去ったのであったが、この頃から私は次第に故郷への思いがつのっていくのを感じていた。米占領下の沖繩ではあったが、むしろになつかしかった。この思いは明治生まれの母にはいっそう強いものであったようで、夫と子供達を送り出したあと、私と母は茶の間で、よく沖繩のことを語りあった。トランクをあけて、沖繩で書きためた原稿を読み返すのも、そういう時であった。母は、これが本になるといいねえ、などといいながら、いっしょに読んだ。

語りあきると、私達は沖繩のわらべ唄を歌った。ひなびた単調なメロディのわらべ唄は、思いがけない豊かさで、沖繩の自然や人情を語りかけて、私達の郷愁を慰めるようでもあり、またいっそうそるようでもあった。

ていんさぐぬ花や

爪先に染みてい

親ぬ諭し言や

肝に染みり

沖繩の娘達は、赤いていんさぐの花の汁で爪を染めた。戦後の沖繩にアメリカ風にマニキュアが流行<sup>はや</sup>った時、母はこの歌をひきあいにして、マニキュアの本場は沖繩なのだといっていた。てんさぐの花で爪を染めるように、親の教えさとすことを、よく心にとどめよ、という教訓の歌である。これは娘の私や孫達に聞かせるために、母が最もよく歌ったわらべ唄の一つであった。

わらべ唄に、沖繩の心が豊かに盛りこまれていることに気づいて、私は今まで知らなかった唄を、一つずつ母から教わっていった。これを音楽教室の子供達に教えてみると、子供達は沖繩方言のままのわらべ唄を、喜んで歌った。

東京で暮らすうちに、本土の人達の意識には、沖繩はあまりに遠い存在なのだということを、否応なく知らされて、私は沖繩が切り捨てられている原因の、どうしようもない根を見たいような気がしていた。まず本土の人達に沖繩の心を知ってもらう努力を、沖繩人<sup>うちなんちゅ</sup>がやらなければならないのだと悟って、わらべ唄を通してそれをしようと考えた。

四十七年に沖繩が日本に復帰した。それは私達が願う復帰とは遠いものであったが、ともかくも日本に帰ることはできた。その年、私は沖繩わらべ唄保存普及会を作ることを目指した。沖繩でもわらべ唄を歌うことは、もうなくなっていた。子供に歌われ、歌いつがれてきたもの

は、歌わなくなると消えてなくなってしまう。これをなんとか残さなければ、と考えたのである。

保存普及会を思いたったのには、もう一つ別の理由がある。次の年の六月に、人一倍元気で氣丈な母が七十四歳で脳軟化症のため病歿した。私は五十一歳のその年まで、母と密着して生きてきて、母の庇護のもとでぬくぬくと甘えてきた。戦後の三十年間も、母に励まされ慰められて、なんとか生きおおせてきたといえる。私は年がいもなく、母のいないこれからの日々を思つて、暗たんとした思いであつた。この母をわらべ唄伝承の中に生かしたい、これがもう一つの理由であつた。

十月になつて、二つの日刊新聞に保存普及会の呼びかけの文を載せてもらった。読者のために設けられた小さな欄であつたが、それでも二十人が集まり、会が発足した。私がすでに採譜した三十曲に加えて、更に二十曲ほどが楽譜に記録された。

この時新聞の呼びかけの記事に目をとめてくださったのが、東京新聞の富谷鋭一さんである。富谷さんは「話題の発掘・この人」欄に「沖繩のわらべ唄保存に尽くす」として、私のことを紹介してくださった。そしてこの東京新聞の記事が、渋谷の小劇場「ジャン・ジャン」の代表者・高嶋進さんの読まれるところとなつて、高嶋さんは「ジャン・ジャン」でのわらべ唄公演という機会を私に与えてくださった。

私の耳はその時分から急速に聞こえにくくなっていて、もしこのまま進めば、あと二年で完全に聞こえなくなるといわれていた。病院では「神経性難聴」という病名をつけた。幸いに、補聴器の助けで日常の用事はどうにか足りているが、耳はちょっとした緊張にも敏感に反応して、音を拒否する。とりわけ恐怖感におそわれた時は、全ての音をしめ出して、私を音無しの世界に閉じ込めてしまう。これはたぶん戦後の沖縄での、恐怖と苦痛に満ちた体験のくり返しがもたらした、一種の神経病なのであろう。

あと二年といわれた、その二年間に全てを賭けてみたいと思っていたから、高嶋さんの配慮はたいへんありがたいことであった。「ジャン・ジャン」の企画を担当する松田克則さんは、私のために八回にわたる公演のスケジュールを組んでくださった。更に耳と私の神経を充分考慮して、音響装置と照明に工夫をこらしてくださった。

公演に先だって、私はトランクの原稿のことを高嶋さんと松田さんに話してみた。するとお二人は、その内容をあわせて弾き語りしてみてもどうかとすすめてくださった。こうしてわらべ唄と「トランクいっぱいの沖縄」と題した手記の弾き語りとはじまったのである。

「ジャン・ジャン」で語っているうちに、私の断片的な書き散らしの原稿が、わらべ唄とはまた別の方向から、もっと現実的に沖縄を語り得る、という手ごたえをつかんでいった。これは最初は出版を頭において書いたものではなかったけれども、母は病床で、必ず本にするように

といい残していたし、私もいつからか時期がきたら、ぜひそうしたいと考えるようになっていた。

その時期はまもなくやってきた。最終回の公演の日、佐々木芳人さんが「ジャン・ジャン」の楽屋に私を訪ねてくださった。初対面の佐々木さんは、主に弾き語りの部分について、いろいろと私に尋ねられ、それが私のトランクの原稿の一部を抜き出したものとわかると、それを一冊にまとめようと、その場で出版の話を決めてくださった。豪放な外貌にふさわしい思いきった決め方であった。五十年初夏のことである。

こうしていろいろな方に助けられて、沖繩を語るという私の仕事は、明確な方向を与えられてきた。自分の恥多い生きざまを語ることにたじろぎながら、しかし戦後の沖繩を生きてきた者の義務として、自分のたどった軌跡を語ってみようと思う。

とはいえ、慣れない私に、一冊の本をまとめるという仕事は、容易なものではない。トランクの中身は、折にふれ、感情の起伏にまかせて三枚、五枚と書きなぐったものの寄せ集めである。これを選びわけ、遠い記憶を呼びもどしながら、沖繩の戦後史と関連づけていく作業は、時に手に余るものであった。事情を察してみき書房では福本英子さんを紹介して下さった。辛抱強い励ましと指導を得て、どうにかこの苦しい作業を終えることができた。整理のできた材料に従って、以下ほぼ年代を追う形で書き進めることにした。

三人の子供達は無事に大人になって、それぞれに幸せな家庭をもって暮らしている。私は本土人の夫と、この家で生まれた高校生の末娘の成長を見ながら、今は静かで平和な日々を送る身である。しかし、沖繩は、日本復帰後の現在も、まだその位置を確かには定め得ないで、ゆれ動いている。ゆれ続ける沖繩の中で、沖繩の人々は、沖繩のあるべき姿を手さぐりし続けているのである。私は、私自身を語ることで、沖繩人としての自分の位置をさぐっていきたいと思っている。そしてそれが私の心の中の沖繩の位置をさぐることにつながると同時に、本土人に沖繩人の同民族としての深い愛情の交流を念じているのである。

また、本書のもととなった「手記」を書き続けるにあたって、多くの先輩、友人、そして家族の暖かい励ましと慰めがあったことに心から感謝いたします。本書の出版については、みき書房の富田義三さんにお世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

